

「何で人間って生きているの?」というような、根本的なことってありますよね。私にとつてモーツァルトの音楽はそういう存在です。

モーツァルトのオペラを歩く

① ドン・ジョヴァンニ



② 偽の女教師

③ コジ・ファン・トゥッテ

④ ファイカルの結婚

⑤ 後室がらの通文

⑥ ツァーデ

中嶋彰子と歩く モーツァルトの街、 ウィーン

*A walk
in the Mozart's town
Vienna
with
Akiko
Nakajima*

写真 三浦興一 Koichi Mura

モーツァルトは宇宙人

モーツァルトがあのような軽妙洒脱な音楽を生み出すことができたのは、このウィーンという街に住んだからこそだと思います。もし、モーツァルトが、例えばバッハが長く暮らしたライプツィヒに住んでいたとしたら、片目で笑って片目で泣くと言われるような、ウィーン人独特の感覚はわからなかったでしょうし、あのやわらかな、まるで冗談のような音楽を書くことはなかったのではないでしょうが。

このシェーンブルン宮殿に結晶しているウィーンの文化は、近隣諸国、ハン



通称『マリア・テレジアニエロー。に彩られたシェーンブルン宮殿前で。1762年、当時6歳だったモーツァルトが、宮殿内の「鏡の間」にてハプスブルク帝国の女帝マリア・テレジアと家族たちの御前で演奏をしたのはあまりにも有名な話。ヨーゼフ2世の命によりモーツァルトとサリエリがそれぞれ《劇場支配人》と《初めに音楽、それから言葉》を引っ提げ、オペラ対決をしたのもシェーンブルン宮殿内のオレンジリーでした。写真上はシェーンブルン宮殿の大広間の天井画です
[住所] 13区、Schönbrunner Schloß str.





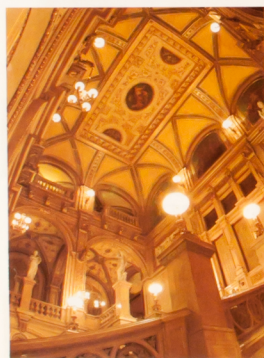
国立歌劇場からケルトナー通りを北に進み、シュテファン広場を左折していくと「ベスト記念柱（三位一体記念柱）」が見えてきます



◀現在、修復中の通称「フィガロ・ハウス」は、来年「モーツァルトハウス・ウィーン」として生まれ変わります（▼工事中のフォローもウィーンらしい）。モーツァルトは1784年9月から87年4月までここに住み、〈フィガロの結婚〉（ドン・ジョヴァンニ）やいくつかのピアノ協奏曲など、傑出した作品を書いたのです！住所 1区 Domgasse5 A-1010
[URL] <http://www.mozarthausvienna.at/>



ザンクト・マルクス霊園にあるモーツァルトの墓（右下）。さまざまな研究を総合すると、モーツァルトが埋葬されたのがここかどうかは定かではないようです。ザンクト・マルクス霊園へは、71番の路面電車、またはSバーンのSt.Martins駅から徒歩7～8分です
[住所] 3区、Leberstr. 6-8



▲外壁の汚れ、屋根の緑青も落とされて、見違えるほどにきれいになったウィーン国立歌劇場（◀内部）。現在、指揮者の小澤征爾が音楽監督を務めています。6月には、音楽監督の任期を2010年まで延長することが発表されました
[URL] <http://www.wienerstaatsoper.at/>



最初に私が取り組んだモーツァルトのオペラは、〈ドン・ジョヴァンニ〉。ツェルリーナでした。その次が〈フィガロの結婚〉のサザンナ。サザンナは一昨年新国立劇場で、今年の春には同じ新国立劇場で〈コジ・ファン・トゥッテ〉のデスビーナも歌いました。他には、もう7、8年前になるでしょうか、インスブルックとベルンで〈偽の女庭師〉のサンドリーナを歌いました。来年の「モーツァルト・イヤー」には、〈ツァイーデ〉というモー

モーツァルトのオペラはアンサンブルが命

宙人」笑。

ガリーヤスロヴァキア、一時は国境を接していたトルコなど——からさまざまな影響を受けています。街の北側をドナウ河が流れていますから、どうしたって周囲の文化が流入してくるのです。モーツァルトはとても社交的な人だったんですね。ウィーンにいながら、いろいろな文化を積極的に取り込もうとしました。イタリアへの憧れを抱きながら、自分の名前をイタリア風に改めたりもしています。彼自身は、「自分はウィーン人」という意識をもっていたかもしれませんが、ヨーロッパを旅していろいろな音楽、文化を吸収していましたから、ある意味では「ウィーンの作曲家」とは言えないと思うんです。「モーツァルトはウィーン人だ！」「いや、ザルツブルク人だ！」とか、「いや、コスモポリタンだ！」とよく議論されますが、私からすれば、「モーツァルトは宇宙人」笑。

ツァルト初期のめずらしいオペラにも出演する予定です。

モーツァルトのオペラはイタリアのレパートリーなどとは違って、アンサンブルがとても大事です。ひとりの歌手がいくらがんばっても、チームワークがとれていなければ、うまくいきません。もちろん、聴かせどころのアリアは重要ですが、出演する歌手一人ひとりがアンサンブルのバランス、自分の役柄の性格、オペラ全体の中での役割を理解していることが大切です。以前、私の先生が「モーツァルトのオペラは、アリアがなくても、レチタティーヴォだけで成立するオペラ」と言っていました。確かにそうなんです。「相手はこう歌い、どういうふうに表現するんだろ」と考えながら、相手の表情が変われば、こちらもとさに反応する表現を変えられる……、そのくらいの余裕がなければ、モーツァルトのオペラの魅力、楽しさはなかなか出せないと思います。

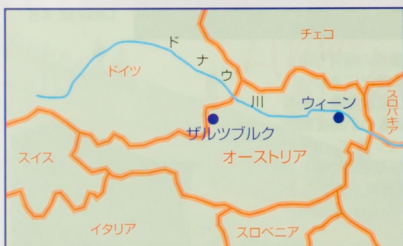
一方、最近日生劇場で歌った《後宮からの逃走》のコンスタンツェはまったく逆で、テクニクの面が大変に難しい……。声のタイプはリリックなのですが、音域がものすごく高いんです。しかも、まるでマラソンをやっているように延々と歌わなければならぬ役ですから(笑)。まだ私が駆け出しのころ、《ドン・ジョヴァンニ》のツェルリーナを歌ったときのことですが、相手のドン・ジョヴァンニは、声の太さも、性格もまったく違う2人というキャストینگだったんです。



◀ウィーン楽友協会。そのアルヒーフ(資料室)には、モーツァルトの交響曲第40番の自筆譜をはじめ、貴重な資料が多数収められています。*モーツァルト・イヤー*には、数々の関連コンサート、イベントが行われます(※P124~参照) [住所] Bösenborferstr.12 [URL] <http://www.musikverein.at>



▲王宮の向かい、美術史美術館と自然史博物館に挟まれたマリア・テレジア広場にあるマリア・テレジア像の右側面には、ハイドン、グルック、ゲーテとともに、幼いモーツァルトが描かれています(写真下) [住所] 1区、Maria-Theresien-Platz



◀ウィーン・フェスト・ヴォッヘンのチーフ・プロデューサー、アッティラ・ラング氏とハバゲーノの像の前で。アン・デア・ウィーン劇場は、モーツァルトに《魔笛》を委嘱し、自らその台本も書き、初演に際しては、ハバゲーノを演じたシカネーダーが1801年に建設しました [URL] <http://www.theater-wien.at>





特集I ●モーツァルトを歩く～モーツァルト・イヤーを堪能するために



▼館内は各種レストランが軒を並べ、中でも7階の日本料理「雲海」の和食は評判で、ここを訪れる一流アーティストも多いといえます

▶国立歌劇場を左に見ながらケルントナー通りを進むと、左側にCDショップ「EM」が見えてきます。オペラの前後の時間などに立ち寄ってはいかがでしょうか
[住所] 1区、Kärntner str.30



▶ブルク庭園のモーツァルト像は、もともとはカフェ・モーツァルト（P88参照）の前にありました。「カフェ・モーツァルト」という名前は、この像に由来しています



7月28日にはシュタイアー（ウィーンとリンツの間にある小都市）で行われる音楽祭の《魔笛》でバミーナを歌う中嶋さん。「その音楽祭は、私の主人が音楽監督をしていて、指揮もします。私がバミーナを歌って、娘も息子も出るんです。家族全員がオペラに出るなんて、きっと最初で最後でしょうね」（笑）。今後は、11月には高崎と東京（東京オペラシティの「B→C」、P＝松本和昇）でリサイタル。モーツァルトの誕生日、1月27日から29日にかけては、ムジークフェラインでリサイタル。5月にはピーター・セラース演出のモーツァルト《ツァイデ》（ルイ・ラングレ指揮ザルツブルク・カメラータ）にも出演が予定されています



▲ウィーン有数の高級ホテル、グランド・ホテル・ウィーンの外観。館内は伝統的なウィーンの装飾を随所に施し、ゴージャスかつ落ち着いた雰囲気演出しています。かつては城壁があったリンクに面しており、国立歌劇場へも徒歩2、3分、楽友協会、コンツェルトハウスにも徒歩数分と音楽ファンにはこの上ない好条件の立地です

■グランド・ホテル・ウィーン
[住所] Kärntner Ring9,A-1010 Wien
☎+43-1-515800
[URL] <http://www.grandhotelwien.com>



グランド・ホテル・ウィーンのロビー階段で

理解し、テクニクの面でも自由になったときに初めて、心の奥底から本当の感情というものがわいてくるのだと思います。ですから、難しいフレーズが出てきた時に「怖いな……」ってなると、音楽表現がしぼんで消えてしまいます。ですから、音楽から自由になるために、私たちはまずはテクニクをしつかりと勉強

ありますから、それをどのように表現するかがとても難しい……。「何で人間って生きているの？」「どこから生命ってやってくるの？」「宇宙の果てはどこなの？」というような、あまりにも根本的なことってありますよね。私にとってモーツァルトはそういう存在です。

恐ろしくくぐりの深みがあり、それをどのように表現するかとても難しい……。「何で人間って生きているの？」「どこから生命ってやってくるの？」「宇宙の果てはどこなの？」

というように、あまりにも根本的なことってありますよね。私にとってモーツァルトはそういう存在です。

その異なる2人のドン・ジョヴァンニとそれぞれにリハーサルを重ねていくと、相手によって、自然と表現のしかたは変わってくるものだと思います。私たちは公演まで、とにかくテクニクを磨くわけです。感情というのは、練習したからといってあふれてくるものはありません。自分の頭でそのオペラを

するのです。
モーツァルトは孤独だったのではないのでしょうか
一般的には、モーツァルトは駄洒落が好きで、幼い感じの人だったと言われていますが、何と言っても天才ですから、実際はものすごく孤独だったのではないのでしょうか。肉親を除けば、自分の才能を本当に理解してくれる人はまわりにはいなかったでしょうし、自分の偉大さ、才能を誰よりもわかっていたのは彼自身だったわけですから！ モーツァルトが書いた全作中、90％は長調の曲ですが、表面的には明るく、美しく、楽しくても、どこか寂しく、もの悲しい感じがします。彼が書いた音楽は3歳の子供でも弾けるようなシンプルなものですが、とても美しく、恐ろしくくぐりの深みがあり、それをどのように表現するかとても難しい……。「何で人間って生きているの？」「どこから生命ってやってくるの？」「宇宙の果てはどこなの？」